

## 国宝・別所安楽寺の八角三重塔

新井 宏

十月中旬の連休、日本計量史学会での講演のため上田市郊外の別所温泉を訪れた。松茸の名所とかで、観光客で混み合っていたが、私の目当ては、安楽寺の国宝八角三重塔である。なにしろ、この禅宗様(唐様の八角三重塔は、私にとって永年の「あこがれの塔」なのである。

学生の頃、古寺巡礼に凝っていた。和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物詩』を片手に、学割で夜行列車に乗り、奈良や京都に向かっては、寺院を見て回っていた。観光バスも利用したが、お金が無くなると、コッペパンを齧りながら歩くしかなかった。そのおかげで、奈良・平安期の建築様式にも多少通じるようになり、我が生涯のテーマ「建築尺度研究」にのめり込むきっかけを作ってくれた。

いま、手元には訪問した各寺院で入手した「古いパンフレット」がたくさん残っている。ひとつひとつ思い出

が込められているし、もう世の中に残っていないものもあると思うと捨てがたい。

その他にも、国宝等の建造物や彫刻の古びた「写真集」が結構ある。その中には、分不相応に講談社版の『日本の美術大系』もある。全十一巻で定価を見ると二万二千円とある。昭和三十四年の発刊であるから、大学三年生の頃に買ったことになるが、よくお金を工面できたものである。

その第一巻が「建築」である。国宝が七十一件、重要文化財が二十五件、未指定の建造物も十件以上載っている。未指定の建造物には、伊勢神宮、金閣寺、桂離宮、修学院離宮や京都御所などがある。新たに再建した場合は対象外らしいが、桂離宮や修学院離宮が重要文化財にも入っていないのに驚く。

ところで、現在、国宝に指定されている建造物は百二十四カ所、二百十六件ある。その内、畿内に六十九カ所、百四十一件あるので、『日本の美術大系』に載るような有

名建造物は、今までにほとんど見ている。ところが、『日本の美術大系』には安楽寺の八角三重塔は載っていないのである。

安楽寺の八角三重塔の写真を初めて見たのは、社会思想研究会出版部刊、〈国宝シリーズ2〉伊藤延男著『日本の建築』である。昭和三十四年刊、葉書サイズ百五十三頁の小冊子で定価は百二十円、本の背中ではもうぼろぼろになっている。

載っている八十二件の国宝は、ほとんど「日本の美術大系」に見ることができるが、頁をめくって行くと、突然、場違いともいふべき安楽寺の八角三重塔が現れる。

それまでに見て回った、重厚な法隆寺五重塔、凍れる音楽と称される薬師寺三重塔、雄大な興福寺五重塔、可憐な室生寺五重塔などの端正な姿とは全く異なる。そもそも背景の山の斜面には、雑木や雑草が生い茂っていて、国宝建造物の在るところというより、荒れ果てた山寺の雰囲気である。

建築様式は、室町時代初期の禅宗様とあり、高さは十八・八メートル、初層に大きな裳階が付いているので、まるで四重塔である。柿葺(こけらぶき)の八角屋根は軒先を大きく反らせて華やかなのだけれど、垂木が細く、十六・一メートルの室生寺五重塔よりも、むしろ華奢に見える。山間にひっそり佇む姿は、その後の禅宗文化の「侘び・寂び」を先取りしているかのようである。初めて

見た時は、「山村の塔」が、なぜ国宝なのかと思ったほどであった。

禅宗様のことを、かつては唐様と云っていた。唐様とは、和様に対する用語であるが、唐の様式と思うと大間違いである。そもそも和様というのが誤解のもとなのである。和様とは、飛鳥、白鳳、天平様式の影響下にある。それまでの建築様式のことであり、それこそ「唐の様式」が中心である。それが鎌倉時代になって、新しく宋の建築様式が入ってくると、それらを天竺様とか唐様と云ったために、「昔からの様式」を「和様」といったのである。当然のことながら、學術用語としては天竺様も唐様も不適切なので、今では大仏様とか禅宗様という。

天竺は本来インドを意味するが、実際には中国南部の福建省あたりのようで、木材の乏しい中国で「最小限の材料」で大建築を可能にするために発達した様式だという。

治承四年(一一八〇)、平重衡の「南都焼討」によって焼失した大仏殿を重源が建久元年(一一九〇)に再建する頃には、日本でも巨木の入手が困難になっていた。そのため、宋代の建築様式を最も早く導入したのが大仏様で、その後も大建築に主として用いられている。

その一方で栄西や道元らは、宋の中央部の寺院建築様式、すなわち禅宗様を導入した。列柱の間に、貫を通し

て相互間を固定するので、細い柱でも安定した強度を保てる。良く知られている建物には鎌倉円覚寺の舍利殿がある。

禪宗も仏教であるから、円覚寺のように佛舍利を納める舍利殿がある。しかし、禪宗寺院に舍利塔は珍しく、あったとしても旧来の「和様」の建築がほとんどで、禪宗様の塔はここだけである。第一、日本には、この塔以外に八角塔は存在しない。

とにかく、初めて写真を見た時の印象は奇妙で強烈であった。言うなれば、室生寺の五重塔を山間に咲く清楚で華麗な美人とするならば、質素ながら華やかさのある八角三重塔は、青春の想いを引きつける佳人であった。いつか、その佳人に会いたいと想いながら、もう五年も過ぎてしまった。

別所温泉にあるということ以外に下調べもせずに出かけてきたが、昔の写真で見ると、荒れた山の斜面にあるので、結構山奥にあり、歩くと一時間ほどはかかるだろうと思っていた。しかし、案内板を見ると意外に近そうである。近くには北向観音や常楽寺もあると言う。

まずは、北向観音に向かう。道すがら、別所生活改善委員会の掲示板の訃報に、告別式を安楽寺で行うとある。今も地域に密着した寺院なのである。

道路沿いの左側の溪流にかかる橋を渡ると「ほら貝」

の音が聞こえる。朝から何かの勤行かと近づくと、石上が電動工具で北向観音堂の石段を一生懸命に削っている音であった。

北向観音という名称は堂が北向きに建つことに由来する。「北斗七星が世界のより所となるように」という観音の誓願によるとあるが、それよりも、南向の長野善光寺が来世の利益、別所の北向観音が現世の利益をもたらし、善光寺のみの参拝では「片参り」になるとの説明に説得力がある。実にうまい宣伝を考えたものだ。

境内には、崖地に建つ医王尊瑠璃殿がある。その様式を懸造りと言うが、大規模のものに「清水の舞台」がある。鳥取県三朝山中の三仏寺奥院、国宝の「投入堂」を思わせる造りであるが、山国の日本には、百近くの例がある。

また、川口松太郎の「愛染かつら」で有名な樹齢三百年ほどの桂の木も境内にあり、「縁結びの霊木」として親しまれていると云う。だから別所温泉では安楽寺よりも北向観音の方が有名なようだ。

北向観音の境内を一回りして元の道に戻ると、その交差点のすぐ前に、安楽寺の黒門がある。崇福山という扁額が掲げられている。参道の右側には蓮池があり、坂道を登って行くと、瀟洒な山門に出る。韓国で古寺を訪れた時に見かけた一柱門に似る。そう言えば、韓国の仏教

の多くは禅宗系である。

山門の脇に、思いがけない掲不文を発見した。「年輪年代法」という年代測定法があるが、それを日本で初めて開発した光谷拓実氏が、翌十二日に講演会を当地で開くとの案内である。私も年代測定法では、色々と発言をしているので、年輪年代法や光谷拓実氏を良く知っている。

こんな山中の町まで、考古学ブームが及んでいるのかと思つて驚いたが、調べて見ると、八角三重塔の木材の伐採年代が年輪年代法によつて、西暦一二八九年と判明したとのことである。

安楽寺は当地の守護として信州一円に威を張つた塩田北条氏の庇護によつて栄えた寺なので、設立年代は、鎌倉末期以外に考え難かつたはずなのに、なぜか室町初期の建築と考えられていた。質素な佇まいが影響したのであろうか。

もし設立年代が一二九〇年代となると、禅宗様の建築では、仏堂、仏門、仏塔を含めて、最も古い建築となる。従来は、鎌倉円覚寺舍利殿とされていたが、鎌倉市西御門にあった尼寺太平寺(廃寺)の仏殿を移築したものとかかり、今では南北朝時代のものとして推定されている。その上、北条時宗(一二八四年)の創立と伝えられている。東京都東村山の正福寺地藏堂も、実際には室町時代の一四〇七年創建と分かり、安楽寺八角三重塔よりもずっと新しくなった。鎌倉末期の山口県功山寺仏殿(一二三〇年)

や和歌山県普福院釈迦堂(一二三七年)なども、安楽寺の塔より新しくなる。

そもそも安楽寺は、「大覚禪師語録」(建長寺開山蘭溪道隆の遺著)によれば、「建長(鎌倉の建長寺)と塩田(安楽寺)とは各々一刹により、或は百余衆、或は五十衆、皆これ聚頭して仏法を学び、道を学ばんことを要す」とあり、鎌倉時代中期、すでに相当の規模をもつた禅寺で、信州の中心道場であつた。庇護者は北条義政から三代統く塩田北条氏である。

北条義政は、文永の役(一二七四年)の渦中、連署として執権北条時宗を補佐し、文永の役の直後には、蒙古襲来に対する防塁を築くばかりでなく、高麗に遠征して元の拠点を制圧する計画さえ作成している。

その頃、幕府は意外に強気であつた。倭寇で勝手知つた高麗の造船基地を叩くのは、専守防衛よりも理にかなつてゐる。もつとも、文永の役では恩賞の財源が出なかつたために、御家人達を納得させる口実としての計画であつたかも知れない。

しかし義政は、建治三年(一二七七)に突如出家して、信濃塩田庄に引き籠つてしまふ。国難の折から、政治的な対立があつたのかも知れないが、塩田北条家二代目の国時も、三代目の俊時も、元弘三年(一二三三)の鎌倉幕府の滅亡に際して、鎌倉へ馳せ参じ討死している。したがつて、八角三重塔が室町時代の建築とは考え難いので

ある。

それにしても、宋の建築様式が、信州の片田舎に伝えられたのはなぜだろうか。

しょうこくいせん

安楽寺の開祖、樵谷惟仙は建長寺を開いた蘭溪道隆と同船で帰国した入宋僧、二代目の幼牛恵仁は宋からの来朝僧であるが、信州にやって来たのは、おそらく北条義政の出家の時であろう。その頃には既に鎌倉では禅宗様の寺院が作られていたが、禅宗様が盛行したのは、おそらく南宋の滅亡した一二七九年以降に違いない。

それは、唐の文化が滔々として入ってきた白鳳期にあっても、法隆寺、法起寺、法輪寺など「飛鳥様式」の氏寺が数多く造られたことに似ているだろう。百済の滅亡によって多数の建築技術者がやって来て、唐様式よりも古風な朝鮮様式の建物を造ったように、南宋を逃れてきた建築家も多数いたはずである。やはり僧侶だけでは建造物は作れない。

ついでながら、正福寺地藏堂のことも述べて置きたい。

私が高校生の際には、東京にある唯一の国宝建造物であり(後に迎賓館赤坂離宮も国宝となる)、日本史の山田先生から教えられて見に行ったことがある。日本大学の大学院生であった山田先生は、授業で、法隆寺の救世観音、百済観音、東大寺の三月堂や不空索観音、中尊寺

や毛越寺、円覚寺舍利殿などのキーワードに出会うと、熟弁が止まらなかつた。おそらく、私が安楽寺の八角三重塔の写真に惹かれたのも、国木田独歩の『武蔵野』の雰囲気を残す正福寺地藏堂や深大寺の白鳳仏「釈迦如来像」を見て回っていたからであろう。

山門を過ぎて、緩い坂を進むと本堂と庫裡がある。寄棟造りで大屋根を乗せ、安楽禅寺の額を掲げる本堂も風格があるが、新築と思われる庫裡は、絵に描いたような禅寺建築である。

本堂の前を左に回ると、石段の坂道が現れ、全高十八・八メートルの塔が見え始める。登り口には窪田空穂の歌碑がある。

老いの眼に 観る日のありぬ

別所なる 唐風八角三重塔

空穂の八十歳過ぎてからの作であるが、私も眼の衰えを感じるこの頃だけに、「観る日のありぬ」に、強い印象を受けて、歌碑の元にしばし佇む。

モノクロ写真で知る「佻しい塔」は、屋根軒裏の放射状になった二段の扇垂木がうっすらと赤身を帯びて、意外に華やかである。椽皮葺の屋根の下は、柱の上だけでなく柱間にも組物を密に配し、柱の根元にはソロバン状の礎盤を置き、頭貫の端に木鼻を施す点など、細部に至るまで忠実に禅宗様で造られている。

勉強のため、細部の写真をたくさん撮ったが、塔の全体像もいろいろの角度から撮りたい。坂を登って、上空からの写真を撮ろうと思ったが、周りの墓地の保護のためか、舍利塔を上から撮影するのは礼を失すると掲示があるのでやめた。背骨を圧迫骨折した後遺症もあるので、坂を登らなかつたのは正解だったかも知れない。

写真集で見た時は、雑草と雑木で寂しかった背後の斜面が、今では大きく育った樹木の緑で覆われて、淡い朱色の木組みが映える。やはり日本最古の禪宗様の国宝建造物だけのことはある。

安楽寺八角三重塔に学生の頃から注目していたことで、先見の明があったような気分になり心が弾む。ずっと心に止めていたことが、報われた気持ちで誇らしい。

塔は、清楚な美しさから、修復後は、かなり化粧しているとは言え、ますます美しく、青年時代の恋人を偲ばせる。やつと会えた。

帰路には、常楽寺や別所神社にも立寄って行こうと、山際の道を採ると、伝芳堂という小堂に出る。中には、開祖の樵谷惟仙と二代目の幼牛恵仁の像があり、そばには島木赤彦の歌碑が立っている。

山かげに 松の花粉ぞ こぼれける

ここに占りにし み佛の像ある

み佛の像とは、開祖と二代目の木彫のことであるが、堂内が暗くてよく見えない。窪田空穂と云い、島木赤彦と云い、長野県出身の歌人は多いようだ。一茶、曾良、藤村からの伝統であろうか。

別所神社から見下ろす別所温泉の町並みはくすんだ秋の色に覆われていた。小学生の頃、鮮やかな紅葉よりも、少しくすんだ秋の広葉の緑黄朱色を画用紙に描いて見たかった。それが今では、デジカメで簡単にできる。

別所温泉から、娘や孫たちが住む安曇野までは、直線距離なら四十キロメートルほどであるが、上田から新幹線で長野に出て、松本に戻り、大系線に乗ると二時間以上かかるであろう。

今夜は、安曇野で祝杯をあげよう。

